

「カレーと村民」

作 じまのはえ

登場人物

浜太郎…大阪吹田村の元庄屋浜家の当主。

浜次郎…留学から帰って来たばかりの次男坊。

浜まん…太郎と次郎の母。

浜茂…太郎の妻。実家は京都。一児の母。

宮川大助…吹田村住人。

おはな…大助の妻。

アキ…吹田村住人。次郎に憧れ勉学の道を励む。

おつな…吹田村住人。潮の妹。

潮(ウシオ)…海軍で機関兵として働くが、事故により心身を病む。

お留…吹田村住人。浜家の所有する船で働く。息子を戦争で失う。

オマサ…浜家に奉公する老女。孫を戦争で失う。

ネ…山田村から奉公に来た少女。

薬屋…自称富山の薬売り。

☆方言について

浜太郎、まん、茂、アキは京都よりの関西弁。

他の村人達は北摂地域の言葉遣いであるが、「柔らかい」関西弁を心がけるべし。

浜次郎は現在の標準語に近いイントネーション。

薬屋は長年の行商生活により、関西弁の混じった怪しげな富山弁で喋る。

舞台は「浜家」の土間。浜家は江戸時代には庄屋をつとめた。明治になった今も村の世話役的存在だ。村の大地主であり、近くを流れる安威川を利用した運送業も営んでいる。

上手には中庭に出る戸口がある。客席から見えないが、中庭にはクスノキがあり、鶏も飼われている。その先には裏門があり劇中で浜家を訪れる村人は皆ここからやってくる。

舞台下手は台所になっている。何より目を引くのは大きな竈。その周囲に消し壺や火吹き竹などがある。他に水瓶や消壺、まな板、盥、鍋、七輪、ヤカンなどの生活用品。薄暗い棚にはぬか漬け、ラッキョウ、塩などの食料品が棚に並んでいる。また棚の上の物を取るための足踏み台もある。

下手には屋敷の玄関(表)に出る通路があり主に奉公人たちが使用する。

舞台中央後ろ側は「落ち間」(土間に来た村人に対応するための場所)である。

落ち間の上手隣に「勘定の間」の戸が見える。「勘定の間」は当主の執務室であり、当主以外は入れない。

落ち間の先には浜家の人々が寝起きする「奥」がある。奥の様子は客席から見えない。

シーン① 新聞詠み

朝食がすみ土間での仕事もひと段落したころ。

中庭から「♪。パ。パ。パ。パ。パ。パ。パ。パ。パ。」と奇声がする。

浜家の次男坊、次郎が声楽の練習をしているのだ。

曲目はモーツァルト「魔笛」より「パ。パ。パの二重唱」。

その様子を、次郎の母「まん」、兄嫁「お茂」、奉公人「オマサ」、新人奉公人「ネ」が疑わしそくに覗いている。

オマサの手には箒。

ネの手には干す前の洗濯物(オシメ)がはいった籠ある。

まん パ。パ。パ？

オマサ パ。パ？

お茂 パ。パ。パ。パ？

まん 何を言ってますんや？

お茂 きつとあつちやの歌やおまへんか？

まん 歌？あれが歌かいな？

お茂 エゲレスか、フランスか、どっちにしろあつちやの言葉でいせ。

まん そやけど「バ」ばかりやな。

お茂 お母さま、どないしまよ。

まん 何が。

お茂 そやし、止めた方がよろしいやろか。

オマサが庭の次郎に向けて手を合わせる。

オマサ ありがたい、ありがたい。

お茂 オマサはんどないしたん？

オマサ あれはきつとあつちやのお経だす。

お茂 お経？

オマサ へえ。次郎さまは海を越え山を越え、天竺よりはるか向こうに行かはったお方だす。きつとあつちやでありがたいお経を仕入れてきなすつたに違いおまへん。ありがたい、ありがたい。

オマサにつられネも手を合わせる。

オマサはやがて涙ぐむ。

オマサ お家さま、御寮さん、今度のこと、ほんまにありがとうございます。こないしてまた浜のお家に奉公させてもらえるやなんて、わたしにはもつたいないことでおます。

お茂 何を言うてんの、お礼をいうのはうちやわ。オマサさんに戻ってきてもろて、うちらも助かつてま。

オマサ 何でもさせてもらいま。何なりと言つとくんははれ。

お茂 そんな気張らんでええやないの、新しい奉公人もいるさかい、オマサはんはゆっくりしたらええんよ。

オマサ 最後の奉公やおもてがんばらしてもらいま。

お茂 そんな、

まん オマサはん。

オマサ へい。

まん この浜家かて昔とはえらい変わつとりま。年寄りや言つてポーつとしてたらあきまへんで。日に三度のおまんまにみあう働きはしてもらいまつさかいな。よろしいな。

オマサ へえ！

まん あんさん、名前は何でしたかいな。

ネ はあ、ネです。

まん おネはん。(手にした箆を見て)それ何のですの？

ネ あ、

まん 「あ」やおまへん。はよ干してきなはれ！

ネ うん。

オマサ 「うん」やない、「へい」！

ネ へえ！

オマサは下手通路から去る。ネは上手戸口から中庭に去る。

お茂 お母さま。ちよつとキツおまへんか。

次郎が中庭からやつてくる。

次郎 やはり日本は暑いですね。

まん (遠くに)オマサはん！次郎に麦茶。

オマサ(遠くから声のみ) へーいー！

次郎 いいんですよ。お茶くらい。

お茂 そうだす。お茶くらい自分でいれなあきまへん。

次郎 僕だつて子供じゃないんですから。

次郎は台所のヤカンからお茶を汲む。

お茂 次郎さん、さっきの何ですか？

次郎 さっきの？

お茂 ぱぱぱ。

次郎 ああ、ただのモーツァルトですよ。

急ぎ足のオマサ、通路から登場。

オマサ (次郎がお茶を持っているのを見て) すんまへん。

次郎・お茂 え？

オマサ わたいがどんくさいばかりに、皆さまに迷惑を(涙ぐむ)、

次郎・お茂 ……。

まん オマサはん。表の掃除はすみましたんか？今日は太郎の新聞詠みの日です。早

せんと皆さんお越しになりましたせ！

オマサ へい！

オマサは通路に去る。

まん よろしいかお茂、浜家の御寮人たるもの、人見ても言わなあきまへんで。

お茂 はい。

まんは立ち上がる。お茂と次郎が支えようとするが、ふり払って奥に去る。

次郎 どうも苦手なんだよな、日本の年寄り。

お茂 けつたいな言い方。ほしたらあつちやの年寄りは得意ですか？

次郎 いえ、年寄りはどこでも一緒です。

お茂 やっぱり。

次郎 もうこの家には慣れましたか？

お茂 さあどないでつしやる。

次郎 随分慣れたように僕には見えますよ。ちよつど留学に行く時でしたもんね。

お茂 そうでんなあ。

次郎 さすが母さんがみこんだお人だ。今じゃ立派な浜家の御寮さんですよ。

お茂 おおきに。うれしおす。

次郎 …母さんのことなんですが、

お茂 へい。

次郎 久しぶりだったせいか、ずいぶん小さくなった気がするんです。元気が無いっていうか、今朝のご飯もまったく箸をつけなかつたみたいだし。

お茂 あれでも次郎さんが帰ってきて、ずいぶん元気にならはったんよ。

次郎 そうですか、

お茂 (小声で)それより昨日の話でつけどな。

次郎 ……。

お茂 次郎さんにどうしてもちゆう気持がおましたら、ウチの人も応援しまっせ。

次郎 兄さんが何か言っていたのですか。

お茂 昨日、あの後でポソつと言つてましてん。「三年くらいで気持はかわるやろか」って。

次郎 はあ。

お茂 どうなん？三年たつて気持はかわつたの？

中庭からお留の声。

お留(声のみ) まいどーおはようさんです。

次郎 誰か来ましたね。

お茂 今日アキさん来はるさかいな。

次郎 え？

お茂 今朝一番にお母さまが使いださはつたんよ。次郎さんなんぞお母さまに頼まはつた

ん？

次郎 はあ。

お茂 もうはつきりせん人やわ。知ってる？アキさん女学校やめはったんよ。

次郎 え、やめたんですか？

お留(声のみ) まいどー

お茂 (うなづく)

次郎 どうして？

お茂 そら本人に聞きなはれ、

お留 (声のみ) 留ですー。

お茂 (戸口から中庭に) どうぞー。入ってくれやすー。

戸口よりお留登場。

お留 おはようさん。

お茂 おはようさん。今日も一番乗りやね。

お留 旦那さんに帳面。あ、次郎はんおはようさんです。

次郎 おはようございます。

お茂はお留のためにお茶を汲む。

お留は落ち間に腰掛け、そこにあった団扇を手にする。

お留 どうだつか久しぶりの日本は？

次郎 暑くて、

お留 まだ九月でつさかいな。

次郎 いつもお元気ですね。

お留 へえ、体だけの資本家でつさかい。

次郎 へー難しい言葉知ってるんですね。

お留 旦那さんの新聞読みのおかげですわ。

次郎 そうか兄さんは意外と啓蒙家なんですね。

お茂 (お留にお茶を出す) あんなもんだ楽やわ。

お留 おおきに。(お茶を飲む) あー。(土間の匂いを嗅ぐ) ええ匂いしてますな。

お茂 ええもんやおまへんで。こないだと同じ。

お留 お稲荷さんでっか？

お茂 まあ、

お留 次郎はん、御寮さんのお稲荷、食べたことありまっか？

次郎 いえ、

お留 こころのお稲荷とは全然、

次郎 全然？

お留 さすがは京都ですわ、

次郎 へー。それは楽しみですな。

お茂 もー。

お留 (お茶を飲み干し) こつおさん。(奥に) 旦那さん。帳面あらためておくれやす。

奥で赤ん坊の泣き声。

お留 あら？

次郎は笑う。お留はお茂に頭をさげる。

奥から太郎が来る。

太郎 ……。

太郎は無言のまま帳面を受け取ると、勘定の間にこもる。

次郎 なんですかあれ？

お茂 ノドを養生してますんや。

次郎 ノド？

大助 う、ウツとこの、せせ、

おはな (土間の匂いをかき)あら？今日も御寮さんのお稻荷さんだっか？

お茂 ええ、

おはな いやー楽しみやわ。ウチこないだ食べさせてもろてびっくりしました。こんな小さいんでっせ。やつぱりあれはあれでっか？舞妓さんらのおちょぼ口にあれしてまの？

お上品やわー。ほら、あんた早よ言いな。

大助 わかつてる。

通路からネが登場。背中には赤ん坊。

おはな あら？新しい子だっか？

お茂 へえ、昨日から手伝つてもうてます。(ネに)ほら、挨拶しーや。

ネ うん。ネ。

おはな は？

ネ ネ。

お茂 ネ、言います。よろしゅうに。

おはな こちらこそ。

お茂 こちらは宮川はん。社長さんやで。

次郎 それもビール会社のね。

おはな 次郎はん。からこうたらあきまへんで。ただの牛飼いですわ。

次郎 (ネに)吹田のビール工場は知ってるね？

ネ うん。

次郎 そこで出来たビールをトロツコに乗せるんだ。そのトロツコを牽く牛を飼ってるのが宮川さんの会社。

お留 ほんでその牛が運んだビールを船で大阪に運ぶのが、ウチや。

ネは、客人らに一礼すると、戸口から中庭へ去る。

おはな (大助に) アンタ、まだ言うてへんのかいな。

大助 わかつてる。

おはな 早よ言わんと、皆さん待つてはるがな。

大助 お、おう、

お茂 どないしましたん？

おはな ウツとこの倅、戦争から帰ってくることなりましてん。

お茂 まあ、清六はんが。それはおめでとうさんです。

おはな ありがとうございます。いやー、胸のつかえがすつととれましたわ。お国からは無

事やも死んだやも言うてきまへんやろ。ウチの人なんざこう見えて残酷な人やさかい

「所詮は貧乏人の次男坊や大陸の広い広い原っぱで誰にも気づかれんと野垂れ死にしているんじゃないか」って、こない言いますねんで。おなか痛めた身からすれば長男も次男もありませんかいな。日がな一日泣いとりましたんやけど。それが昨日ですわ。本人から手紙が届きましたてん。二、三週間のうちに帰って来るって。

お留 そうだつか、

おはな わたしもう嬉しゅうて嬉しゅうて。

大助 (おはなに) おい。

おはな ……お留はん堪忍やで、うち舞い上がつても、ほんま堪忍やで、

お留 何を謝るんよ。ウツとこの子はいつも清六はんに遊んでもろて、ほんまの兄弟みたいやつたもん。こんな嬉しいことあるかいな。あの子かてきつと喜んでるわ。

おはな・大助 おおきに。

勘定の間より太郎が出てくる。

太郎 (お留に帳面を渡し) こ苦労はん。

お留 へい。たしかに。

太郎 どうや他所の積荷は？

お留 へえ、神戸から大陸に売りつける荷が増えてま。ウチの湊にも神戸行の荷が仰山たまつてます。

太郎 ほう。

お留 ほんでビール。戦争終ってから大阪へ運ぶビールが二倍三倍ですわ。

太郎 ビールで乾杯か。

お留 今日あたり山場になるとちやいまつか。

太郎 そうか。(夫妻に)宮川はん聞きましたで。おめでとつさんです。

大助 へい。ありがとうございます。

おはな 「心配いただきまじつ。

太郎 どうぞよかつたらこのまま聞いていっておくんなはれ、お耳汚しではございませうが。

おはな へい。そのつもりでおます。

太郎 (中庭に向かつて)おネ。もうじき皆さん集まるころや。支度しといてや。

ネ(声のみ) うん。

太郎 「うん」やない「へい!」(咳払いをし)アカン、喉が疲弊してしもた。お茂、大根にハチ
ミンヤ。

お茂 へいへい。

太郎とお茂は奥に去る。

以下、会話①と②は同時進行。

☆会話①

おつな(声のみ) 「めんください。

次郎 はーい。(中庭に)やあ、おつなちゃん。お久しぶり。どうぞ。

おつな (戸口から登場し)次郎さん、お久しぶりです。

次郎 あれ一人?潮は?

おつな へえ。ちよつと具合がようのうて、すんまへん。

次郎 そうか。それは心配だな、

☆会話②

お留 手紙ど「から来ましたん?

おはな 宇品ですわ、

お留 ほんなら一晩で大阪つきますやん。

おはな それが……

大助 病院からですねん。どうも怪我しとるみたいで、

お留 まあ……

☆会話①②合流

おつな おはようさんだす。

お留・大助 おはようさん。

大助 あれ？潮くんは？

おつな へえ連れて来よう思てましたんやけど、今朝急に具合が悪なって、

大助 そうか、

お留 「本日天気晴朗ナレドモ浪高シ」！

大助 びっくりした。

おつな お留はん。どないしたん？

お留 ウチこれ言ったら元気でますねん。おはなはんも騙されたおもて言うてみなはれ。

おはな へえ。おおきに。

おつな 「本日天気晴朗ナレドモ浪高シ」！

おはな 「本日天気晴朗ナレドモ浪高シ」！

おつな、お留、おはなは笑う。

大助 終わったんやな……

お留 ……ほんまにね。

おつな ウチ、学校のじぶん先生が教室に世界地図かけはってね。鞭でロシアさしまんじやけど、びっくりしたん憶えてるわ。世界の半分くらいロシアですやん。それに比べて日本の小さいこと。

おはな あー怖、

大助 もう勝ったがな、

通路からオマサがやってくる。お茶の支度をする。

大助 お、オマサはん。あのー、実はウツとこの清六、帰ってきますんや。

おつな まあ清六はんが？

お留 そやねんで。

おつな おめでとうさんです。

大助・おはな おおきに。

オマサ おめでとうさん。

大助 うん、おおきにおおきに、これもオマサはんのおかげや。

オマサ ウチは何にもしてまへんで。

大助 いや、その、

おはな この戦争に勝てたんも、オマサはんとお孫さんががんばってくれたおかげや、
うちらホンマにそう思ってますんや。

大助 うん、そう、

オマサ 何人いますんや？

大助 へ？

おつな (土間の人数を数え)五人。

お留 オマサはん、つらおすな。そやけどお孫さんの死は無駄やおまへんで。

お留はオマサに拍手する。大助、おはな、おつなも続いて拍手。

オマサは無言のまま、お茶を皆の前に置くと通路より去る。

おつな 次郎さん。講和談判ってアメリカでしてますんやろ、

次郎 そうですね。

おつな 今度はどこがもらえまつしやるな。

次郎 もらえる？

お留 朝鮮はあたり前やる。ほんで満州、樺太も固おますな。

おつな 固おますか？

お留 そらそうですな。ウチらアホやさかい難しいこと知りまへんけど、いま行つてはる小村寿太郎はんの腕次第ではロシアのスミッコのほうも分捕れまっせ。

大助 いやいや肝心なんは、こつちですわ(と、指でお金の表す)。ざつと勘定してもこないだの戦争の百倍はお金かかってまっせ。

次郎 百倍？

大助 ええ。死んだ人、怪我した人かて、ざつと勘定してもこないだの戦争の二百倍はいますわ。

次郎 二百倍。

大助 そやし賠償金もざつと勘定してもこないだの三百倍はもらわんとソロバンあいまへんで。

おつな 三百倍つて、それいくらなりますん？

大助 そら、すごい額や。

次郎 日清戦争の賠償金が、たしか三億円ですね、その三百倍だから九百億か。

おつな 大助 ひー。

おはな しかし長い戦争やった。

お留 ほんまにな。

おはな ウチは旅順攻略のくだりが忘れられまへん。

お留 あれはつらおしたな。

おつな ほんまに。

おはな ちようどこの人が腎臓に石患つてる時やった。

大助 そやな、

おはな 旅順は落ちんわ、石はでてけーへんわ。

大助 辛かったな。

おつな ウチは広瀬中佐。

大助 (歌い)「杉野のいずい、杉野はいずや」

次郎 何ですかそれ？

大助 知りまへんか？

おはな おつなちゃんも広瀬はんみたいな男つかまえや、
おつな ……

お留 アカンで、どんなええ人でも、若いうちに死ぬ人はアカン。

奥からお重を持ったネがやってくる。

落ち間のどくに置いてよいか、迷う。

おつな どうも、

ネ うん。

おつな ウチ、おつな言います。

ネ ネ。

おつな へ？

お留 ネ。おネはん。

おはな そや。ネコはんにしたらええねん。

ネ ネコ？

おはな ネコはん。憶えやすいわ。

ネ ……

お留 ネコはん、返事はニヤーでっせ。

奥から座布団と布巾を持ったお茂とオマサ登場。

お茂 ほら、そんなとこ立ってんと、お重置きなはれ、

ネ ニヤー。

お茂 え？

ネはやや乱暴にお重を置くと、足早に奥に去る。

お留 御寮さん、それお稲荷さんですか？

お茂 ええ、まあ、

おはな いやー楽しみやわ。

おつな ウチも、

大助 すんまへんな、いつも「馳走になりました、

お茂 何言ってますの、「ちちら」ぞ、いつもいつも集まってもろて、すんまへん。

大助 いえいえ。勉強になります。

お茂は落ち間に布巾を敷き、その上にお重を置く。

女たちはお重の周りに集まる。

お茂 恥ずかしわー、

お茂がお重の蓋を開けた時、中庭からアキの声。

アキ(声のみ) 「ごめんください。

おつな アキちゃんや。

村人たちはアキの名を聞き、即座に次郎の顔を伺う。

お茂 (庭に向かって)どうぞ、入っとくれやす。

奥からまんが登場。

まん 皆さん、おはようさんです。

村人たちは「おはようさんです」と挨拶を返す。

まん ようこそお越しくださいました。今日は、

戸口からアキが来る。

まん (アキを見つけ) アキはん、忙しいとこそすんまへんな。

アキ いえ。

まん どうぞ座つとくれやす。オマサ、お茶、

アキ いえ、うちは、

まん そや、冷やし飴あつたらおだししてんか。

オマサ 冷えてまへんけどよろしいか。

まん ほしたら麦茶でええ。はよだしなはれ、

オマサ へい。

村人たちはアキを呼んだのがまんであることを察し、驚く。

そんななか、屋敷の奥から袴をはいて太郎登場。

太郎は一礼する。皆も一礼。

大仰に新聞をひろげ、新聞詠みがはじまる。

太郎 (新聞を見て)「明治三十八年九月一日」お、囲みで講和条件と書いてあるぞ。

「講和条件。二十九日の講和談判会見において成立したる条件は一切日本の譲歩のみにして吾人はこれを急報するを恥ず。今御用紙国民新聞の報じたる講和否講和条件なる者を左にかかぐ。一、樺太の分割は北緯五十度を以つて分界としその北部は露国これを有し南部は日本これを有し兩國とも樺太においては兵備をなさざる事、」

お留 南だけですか？

太郎 何が？

お留 樺太でんがな。北半分はロシアって、

太郎 (読みかえし)うん。みたいやな。

おはな 続き読んどくんはなれ。

太郎 「一、朝鮮においてもその露国と境を接する所には互いに兵備をなさざる事。一、東清鉄道は長春以南を日本に譲与する事。一、捕虜賠償金は一億五千万円をいだけること。一、沿海州漁業権は日露両国共に同一の権利を有すること。」以上。

お留 満州は？どうなりまんねん？

太郎 満州は(紙面を探す)…書いてへんな

お留 朝鮮は？日本のモンになりまんにやるな？

太郎 朝鮮は(紙面を探す)…書いてへんな。

大助 大丈夫や。まだ賠償金が出てへん。ざつと勘定したかて九百億円は、

おはな 一億五千万。

大助 へ？

おはな 聞いてまへんのか、さつき一億五千万言いましたがな。

大助 そんな…

太郎 どうも声の艶がいまいちやったな。おネ。

ネ ニヤー。

太郎 こらこら、ニヤーなんて返事あるかい。

ネ へえ、

太郎 「へえ」も古臭いな。返事は「はい」ええな。

ネ うん。

太郎 こつ暑いと声に艶がのうなるわ。今晚あたりカシワのすき焼きでもいこか。

お留は太郎から新聞を奪う。

紙面の大文字を指差し。

お留 これは？

太郎 「天皇陛下に和議の破棄を命じたまはんことを請い奉る」

お留 これは？

太郎 「閣臣元老の責任を問うて国民に激す」

お留 これは？

太郎 「白骨の涙」

村人らはしばし茫然。

ネが抱いていた赤ん坊が泣きだす。(ネはあやしなから中庭に去る)

オマサ ウツとこの孫は大死にぞつか。

お留 オマサはんーアンタなんちゆうこと。

オマサ 馬鹿にしくさつて……。

オマサはブツブツ言いながら通路に去る。

おつなが泣き出す。

次郎はそつと土間からいなくなる。(下手通路に去る)

おはな ころごついうことですねん？旦那さん前に言いましたがな、この戦いは日本の利益をまもる為のみにあらず、ロシアの横暴を止めるべく世界が日本に託した戦いであるつて、ちやいまんのか？

太郎 ワシが言つたわけやないがな。

おはな それがこないな仕舞いするやなんて、許される思てまんのか？

太郎 ワシに言つな。

大助 政治家連中や、あいつらがええ加減なとこで手打つたんや。

お留 おつなはん泣いてる場合やあらへんで。

おつな そやけど、

おはな 潮はん最近どないですの？

おつな へい。耳の調子はいいかわらずでして、一言も口きかんと家で黙っとります。今日もてつきりええ話きける思うて、連れてこよう思たんだけど。声かけてもだんまりで。

大助 まあ連れてこんでよかつた。

おつな こないな結果になるやなんて兄さんにどう知らせたらええんか、

太郎 まあまあ何にしろ戦争が終ったんや。ありがたいことやないか。それに考えてみい。

樺太かて満州かてこつ寒いそうやないか。そんなとこもろても、住んで風邪ひいたらかえって損やさかいな。まあこれがほんまの「転ばぬ先の杖」ちゆうやっちゃ。

お留はおつなを介抱しつつ戸口から出てゆく。

宮川夫妻も一礼の後、戸口より去る。

シーン② アキと次郎

まん アキはん。

アキ へい。

まん すんまへんなお忙しいとこおよびたてして。

アキ いえ。今日はどうもけつこつなもん聞かせてもろて。

太郎 アカン、夏の疲れがノドにきたようや。茄子の漬けもん、茄子の味噌汁、茄子と揚げの炊いたん、これのくり返しでつしやる。ええ加減食欲ものうなりますわ。

まん 太郎。

太郎 へい。

まん すまんけど奥いつてな。次郎呼んできてんか。

太郎 へい。(と、奥へ去る)

まん すんまへんな、しょうもないもんお聞かせして。

アキ いえ。旦那さんの新聞詠みのおかげでウチらも世の中のこ勉強させてもらつてま。

お茂 それ本人に言ったげとくんはなれ。きつと喜びますわ。なあお母さま、

まん (お茂の言うことが聞こえず) 死んだあれの父親もああでしたんや。やれ浄瑠璃や地唄や小唄やいってどんだけつき合わされたか。そやけどどつちか言つと次郎のほうか父

親似ですわ。気が弱つて、やさしゆうて。

アキ はあ。

まん 堪忍やで、あんたと次郎のことは百も承知で次郎を外国へ行かした。もちろんあの子の勉強が第一やけど、三年も外国いつてりや、あの子のことや、アンタへの熱も冷めるやろ思ってたんや。

アキ ……。ほんで、今日は何の御用で、

まん わてはな、十六でこゝろ嫁に來ました。明治のこゝろ新一の年やった。これまでのことが全部ひっくりかえつてしもた。そやけど、いま思うと、あの頃はまだのんびりしてましたで。世の中のことも、人の気持ちも、まだ昔のしきたりやらやり方が残ってましたわ。そやけど、最近はおかんわ。ほんまに世の中かわつてしもた。

お茂 お母さま、

まん そら昔やつたら浜家の息子が野合で結ばれるやなんて、そんなこと許されまへん。そやけど、……わたいには次郎の言つことがさっぱりわからんにや。天狗か河童と喋つてみたいでな。時代がかわるちゆうのはこついうもんか思て。そやつたらわてらみたいなおもんは後のもんに好きなようにさすんが、いつちやんええ思てな。もつわたいの手にはおえまへんのや。(と涙ぐむ)

奥より次郎が来る。

まん (次郎に)あとは勝手にしなはれや。

まんとお茂は奥へ去る。

次郎 まあ、そついでにとです。

アキ へえ。

次郎 昨日の夜、お母さんに叩き起こされてね。あれから二年、気持ちはかわつたかって聞かれて。変わってませんと答えたら、小さい声で好きにしなさいって、

アキ ……へえ。

次郎 拍子抜けだったよ。

アキ ……。

次郎は土間に残っていた新聞をひろい、手持ち無沙汰に少し読む。

次郎 ハハハ。

アキ どないしはったん？

次郎 この天声人語。

アキ へ？

次郎 天の声人の語と書いてね、この新聞の一番の売りものなんだ。そこにね、「この講和の責任をとつて元老以下大臣どもを樺太の姥捨て山に捨ててしまえ」と書いてある。ハハハ。

アキ …。

次郎 いや、新聞も必死ですよ、彼らも商売ですからね。

アキ さつき、なんで途中でいなはったん？

次郎 泣きだしただろ。

アキ おつなはんですか。

次郎 苦手なんだよ、ああいうの。

アキ でも、おつなはんの気持ち考えたら、泣くのも当然ですえ。お兄さんの潮はん、海軍さんいって耳が聞こえんようになつて帰つてきはったんやもん。

次郎 僕は戦争にも行つてませんしね。

アキ そんなこと言つてませんやん。

次郎 潮のことは可哀そうだと思いますよ。でも所詮それは個別的な事象です。それに足をとられては政治的な判断はできません。もつと大局を見ないと。だいたい日本人は事実を知らなさ過ぎるよ。勝つたと言つてもロシアからすればただか局地戦に負けただけの話で、息切れしてるのは日本のほうだしね。そんなことも知らずに講和にケチつけるなんて。ルーズベルトも驚くでしょうね。

アキ ほな、なんでそれをあの場で言ひませんか？

次郎 少し、痩せましたね。

アキ こわーてよういままへんにやる。

次郎 言つてもわかつてくれませんよ。

アキ なんぞ？

次郎 あの人たちが求めているのは事実じゃない。自分の息子や弟がどうして死ななくてはいけなかったのか、納得したいだけなんです。

アキ そらそうやん、

次郎 納得できればウソでもいい。そんな人と政治の話ができますか？ だいたい政治とは今生きてる人とこれから生まれてくる人たちの為にあるべきなんです。死んだ人の無念を晴らす為にあるわけじゃありません。

アキ …。

次郎 つまり感情で動く人間に政治の話をする資格はないんです。

アキ そやけど、感情のない人間なんておまへん。

次郎 ほう。女学校ではそんなことも教えますか？

アキ …次郎さんは何で勉強してはんの？

次郎 は？

アキ 次郎さんの勉強は何のためですか？

次郎 …。

アキ ウチ、女学校やめましてん。三年前、次郎さんがエゲレス行くことになって、ウチも何かせなおもて、次郎さんにおいてかれる。どんどん住む世界がかわってしまうおもて。そやけど勉強すればするほどウチは何のために勉強するんやろ。そら良き妻、良き母になるのも大事や思うけど、それだけやないんとちやうやろか。わたしかて世の中のためにできることあるんとちやうやろか、

次郎 やめてどうするんですか？

アキ …わかりません。

次郎 よろしい。東京に面白い学校があります。もちろんそこいらの花嫁学校じゃありませんよ。欧州の女学校に負けない本格的な学問ができる学校です。そこを紹介しましょう。

アキ いや、ウチは…、

次郎、アキを抱きしめる。

次郎 お金のことなら大丈夫。僕から母さんをお願いするから。

アキ ……

次郎 僕も東京に行こうと思ってたんだ。

アキ でも、

次郎 大丈夫。婚約者つてことにして学生を続ければいい。

アキは次郎から離れる。

アキ あの、

次郎 結婚は君の勉強が一段落してからでも遅くない。だいたい日本の女は結婚が早すぎます。男も女も一人前の大人になってからパートナーを見つけたべきです。心配するな。

再び次郎はアキを抱きしめる。

戸口からネが覗いている。溶暗。

シーン③ 不幸な薬売り

同じ日の午後。庭のクスノキで蝉が鳴いている。

土間に富山の薬売りが来て、ネを相手に薬を売りつけている。

オマサは台所の隅で、足踏み台に座って目を閉じている。

薬屋 取りいだしとこうー水、他ならぬ神崎川の水でおまんがな。よー見なっしやいよー。ハッ。

薬屋は瓶に詰められた神崎川の水を飲み干す。(神崎川沿いには様々な工場があり。瓶の水には怪しげなゴミが浮かんでいる)

ネ あー。

薬屋 いそくるなかれ(懐から小瓶を取り出し)。新発明のこの薬、名が「爆露丸」言いよるが、爆は爆発の爆、露はロシアの露、すなわちこの薬を一粒飲みよう後に、いざ戦いに挑めばいかなロシアの大軍でも必爆必勝の秘密兵器。よー見られ、(と爆露丸を飲む)こんで腹中たる病原菌は爆露丸にて爆撃爆退の体たらく。

ネ オナカ壊しますで。

薬屋 あつかりしやんせ。この顔色。最前とちーつとも変わつとりまへんがな。

ネ (顔を見て)目の下が青くなってきたような。

薬屋 なーんも。なーんも。この薬が、陸軍さんがこんどの戦争用につくったもんよ。ワシが特別に手に入れてこうして皆さんにおわけしてるが。お宅さんにもお一ついらんかの？

ネ はあ御寮さんに伺いまへんと。

奥からお茂が入ってくる。

26

ネ あ、御寮さん、

薬屋 御寮人様ですか？まいとさんでございます。(瓶を取り出し)これなんやと思いなさる？神崎川の水が。この(神崎川の水を飲み干す)

お茂 あー。

薬屋 あつかりしやんせ。この爆露丸。これを一粒飲めばおとろしい病原菌もたちまち爆撃爆退！(と、爆露丸を飲む)夏場は水が気になりよるね。御寮人さま、どう？

お茂 へえ、主人に聞いてみませんと。

奥から太郎が入ってくる。

太郎 おーい、坊が起きよつたぞ。

お茂 へえ。おネはん、お願いしまつせ、

ネ へえ。(通路を去る)

薬屋 あ、ご主人様でおられるか。まいどさんでございます。(瓶を取り)こーなんと思ひなされる？神崎川の水がー。これを(飲み干す)

太郎 あー。

薬屋 あつかりしやんせ。こー爆露丸。これを一粒…なんやら腹ういわ(と倒れる)

太郎 大丈夫か？

薬屋 わかりやせんわ。

太郎 くだしそうか？

薬屋 おたくらひどいちゃ。なんで固まつてこんの？皆してきずいな(わがままな)ことなれたらかなわんチャ。ワシ、これ二本も飲んだが、

太郎 すまんすまん。はよこれ(爆露丸)飲んだほうがええんちゃうか？

薬屋 そーは利かんが。はよ、征露丸持つて来てくれんけ？

太郎 よつしや、(お茂に)おい。征露丸もつてきたげて。

薬屋 御寮人さま、きのどくなねー。

お茂は奥に去る。

薬屋 (腹痛に耐えながら)いやー。こー辺りもかわりよつたが。

太郎 ほう、わかるんかい？

薬屋 へえ。ワシら富山の薬売りは日本中の村のことが、こん頭に入っておりますちゃ。

太郎 ええなあ。ワシもそついう仕事がしてみたいわ。

薬屋 御冗談を、

太郎 今日はこの後どこ行くんや？

薬屋 西国街道まで出て、そのまま神戸までいくつちや。ほんで一泊して、アナゴ飯買って

神戸から電車乗って大阪、こんどキンツバ買って、鉄道乗って京都、京都は鯖寿司か、ワ

カメうどんか、どつちもか、

太郎 ええなあ。やっぱり電車と汽車はちやうか？

薬屋 そうねー。電車は煙でよらの、ほんで街中走りよる。でもワシは汽車が一番やね。なんちゆうてもあの音、

薬屋は口で「ドレン弁をきる音」「蒸気を吹く音」「発車ベル」「車輪が転がる音」を器用に真似る。途中でピタリと止まり、太郎と目が合う。

太郎 (戸口のほうを指差し)あっち。

薬屋は、ペコりと頭をさげ厠に行く(戸口より去る)。

オマサが目をひらく。

オマサ 旦那さんはどない思ってますの。

太郎 は？

オマサ 聞きましたやろ。次郎さまのこと。

太郎 うん。

オマサ この家の総領は太郎さまでっさかいな。

太郎 わかつてる。

オマサ 二当家に奉公にあがって五十年。浜のお家の男の子はみんなこのオマサがお育て申し上げました。

太郎 うん。

オマサ これだけは言うときまつせ。次郎さまは風船だす。こっちやでしつかりもつとかんと、じきにえらいことになりま。

太郎 オマサ、心配すな。次郎かてエゲレスで苦勞して性根が座ってきた。男子三日合わざれば刮目して見るべし。次郎も立派になった。これからの日本をしょって立つ男や。思わんか？

オマサ ……。

戸口から次郎登場。

次郎 ただいま。

太郎 うん。

次郎 あー暑い。

オマサ 次郎さま冷やし飴ありませ。

太郎 ほう、そらええな、

太郎は台所の冷やし飴を湯呑につぐ。

太郎 (次郎に)お前ものむか？

次郎 (オマサを気にして)あの、兄さん、

太郎 遠慮すな、ほれ、(と次郎の分もつぐ)

オマサ …オマサが老いぼれやよって、皆さまにやっかいおかけして、

太郎 いや、やっかいなことあるかいな。…はオマサの家も同然や。ゆっくりしたらええやで、
やで、

太郎はオマサを慰めるが、オマサは労わられるほどしおれてゆくようだ。

お茂が戻ってくる。状況を察し、

お茂 オマサはん！何をぼつーとしてますんや！

オマサ へー！

お茂 口ごかす暇があつたら表…は…もう掃除したさかい、晩ご飯は、お稲荷さんが
あるし……

次郎 オシメ、もう乾いてるでしょ、

お茂 そや、夕立に会つたらどないしますの。はよ取り込みなはれ！

オマサ (元気に)へー！

オマサは戸口より去る。

太郎 お茂。もうちよつと言い方があるやろ。

お茂 そやかてお母さまに叱られましたんで、

太郎 は？

次郎 兄さん、惣領たるもの人の気持ちをよまなくてはいけませんよ。

太郎 何の話や？

お茂 あら？さいぜんの人、帰りはりましたん？

太郎 いまはばかりや。

シーン④ 覚え帳

庭先が騒がしくなる。

「ごめんください」とおはなの声。

次郎 (庭に向かつて) どうぞー。

太郎 宮川はんか、

次郎 ええ、

お茂 そや(と、奥へ去る)

戸口より宮川夫妻登場。

大助 どうも、お邪魔です。

おはな ちようどよかつた。旦那さん申し合わせたいことがありますねん。

太郎 どないしました？

おはな わたいら大阪行「思てますねん。

太郎 はあ。大阪。

大助 へえ。け、今朝の新聞ですけどな。ど、どうもあれホンマみたいです。お留はんが下りの船の水夫連中に聞きましたんやけど、お、大阪でもひっくりかえる騒ぎになつとるみたいで。

太郎 ほいで？

大助 ほ、ほんでわてらようよう考えたんですけどな。わ、わてらも大阪行つて講和条約のは、破棄を訴えよう思ひまして。

太郎 破棄？

おはな 女だてらに思われることは百も承知だす。そやけどどこでウチらが動かな戦争で苦労した子らに申し訳がたたんと思ひましてな。お留はんとかだけやあらへん、オマサはんのお孫はん。お光さんとは弟さん。おつなはんこの潮はんは可哀想に気おかしなつたいう噂もありま。全部お国のためやおまへんか。こない思てるのはうちらだけとちやいまつせ。会社行きの連中から小作から水夫連中も、みな怒つてま。この声をちゃんとお偉方の耳に叩きこんだらなアカン。

大助 わてらにや芋と麦ばかり食わしといて、己が困てる女にやええべべ着せてるそやないか。我慢じゃ我慢じゃいいくさつて、こんな目にあわせて、まだ我慢せえ言うつか、コケにするのもええかげんにさらせー

太郎 ほいでウチにどないせいうねん。

大助 へえ、まことに申し上げづらいんですが、

戸口から薬屋が戻ってくる。

薬屋 (雰囲気を察して) なーん。つかえんで、つかえんで、(と言ってまた去る)

太郎 ほいで、なにせえ言うんや、

大助 へえ。その、つまり、

大助は「覚え帖」とかかれた帳面を取り出す。

大助 ま、まことに言いづらいでつけど。大阪行くのもこの人数だす、ど、どないしょか
悩んでますねん。ほ、ほいで向こうで同じような気でおるもんどついで集まって、集会い
うんでつか、それやりたい思てまして。なにかと物入りになる算段で。ま、まずは浜の巨
さんとこから回らしてもらお思ひまして。

太郎 ……。

大助 (おはなに)ほらやつぱり無茶やいうたやろ。

おはな 黙ってなはれ。

オシメを沢山もつてオマサ戸口より登場。

おはな オマサはん、一緒にいきましょ、大阪。

オマサ ?

おはな ウチら大阪行きますねん。大阪で講和反対の集会ひらくおもてます。

「この村の連中だけちやいまっせ。この戦争でしんどい思いした人らが、いま大阪に集まっ
てますねん。いきまひよ。一緒に大阪いきまひよ、

オマサ …。やる時は、やらなあきまへん。

おはな・大助 そや！

オマサ 仇討ちでんな、

おはな・大助 は？

大助 いや、仇討ちとはちやいまっせ、集会だつせ。

オマサ なんやあんたら丸腰やおまへんか。そんなんや仇がとれますかいな、

大助 だから、

おはな オマサはん、ロシアまでどんだけ遠い思てんの。

オマサ …ウチの仇は日本や。

大助 は？

おはな アンタ頭おかしなつたんちやいまつか。

オマサ ウチの孫を殺したんわ、確かにロシアですわ。でもウチかてアホやないで。なんで

ウツとこの孫がロシアの人らと殺し合いをせなアカンのか。安威川で蜷とるのもどんくさ

い子が、なんで海越えてまで知らん国の人らと殺し合いせなアカンのか。そない仕向け
たんは日本やおまへんか。

太郎 ……それは、だから徴兵制度というものがあつて、

次郎 国民だからだよ。国民である以上、国を守る義務があるんです。

オマサ 誰が国民ですか？

次郎 皆です。僕もオマサもオマサの孫も、皆国民。天皇陛下の赤ん坊なんだ。

太郎 オマサの孫らは立派に国民の義務を果たしたんや。誇りに思わな。

オマサはうなだれる。

太郎 (言いにくそうに)オマサ。ぼちぼち風呂の支度してや。

オマサ …へえい(と、通路より去る)

おはな (大助に)ほら、

大助 旦那さん、これ(と「覚え帳」を差し出す)

太郎 宮川はん。お気持はわかりまつけどな、いくら気に入らんいうたかてこの談判は政
府が決めたことや。それにたてつこうやなんて、そらアカンで。

おはな 何があきまへんの。

奥からお茂が、今朝のお重を包んだ風呂敷を持って登場。

お茂 ちょうどよかつた宮川はん、これ持って帰つとくんはなれ、

太郎 後にせえ。

お茂 …へえ、

太郎 宮川はん。ワシかて講和の内容には怒ってるんやで。ひどい話や思う。そやけど、怒
つてもしやーないやないか。今は日本人同士が喧嘩してる場合ちやう。そやろっ。それ
に、警察沙汰なるかもしれんことにワシからお金だすやなんて、なんぞあつてみい、この
村の立場はどうなる。

大助（おはなに）ほらゆうたやなかい。

おはな 旦那さん。こちらは何も我がために言うわけやおまへん。お国のために言うとりま
すんやで。

太郎 そやけど村としては…、

おはな 旦那さん、お国あつての村やおまへんか。

次郎が、おはなに拍手をする。

次郎 兄さん、これはお金を出すべきですよ。この人たちの言っていることは何の間違ひもあ
りません。この戦いは二、三の閣臣元老だけの戦いではありません。国をあげての国民
全体の戦いだつたはずですよ。これまで皆さんがどれほど我慢を重ねてきたか、上の連中
はあまりにも知らな過ぎるのです。これからの日本は清にかわつてアジア諸国の希望
となるべき国。それがこのような講和条約に満足しては西欧列強に笑われるだけ
なく、東洋諸国にも顔向けできないと言えるでしょう。

夫妻は次郎の演説に熱烈な拍手。

太郎 わかった。ウチからは五円ださしてもらお。

おはなと大助は大喜び。

太郎はお金を取りに勘定の間にはいる。

お茂は足早に奥に去る。

おはな 次郎さま、あんた大したお人やわ。

大助 ほ、ほんまや、なんや知らん聞き惚れてしもた。

おはな 大阪で弁士やつてもらえまへんやろか？

次郎 弁士？

お留、戸口からやつてくる。

誰かを探しており、土間を見回す。

おはな お留はん、やりましたで、さすが浜の旦那さんや。五円、五円でっせ。そや、そっち
はどないでした？

お留 こっち来まへんでしたか？

おはな は？

お留 おつなちゃんと潮はん。こっち来てまへんか？

おはな 来てまへんけど、

大助 どないしました？

お留 潮はんは弁士お願いしよ言っていましたやろ。おつなちゃんも承知してたんやけど、
肝心の潮はんがうんと言ってくれへんのよ。弁士いうたかて喋らんでええ、ずっと座つて
るだけでもええさかい言つても、全然アカン。

大助 う、潮くんは耳が聞こえへんにやろ。どないして説得したんや。

お留 なんやわからんけど神経の病気なんやて、そやし常に聞こえへんわけやないみたい。³⁵
おつなちゃんに間入つてもろて説得したんやけど、だんだんおつなちゃんの気も変わつて
しもて。大阪引っぱりだすの勘弁したつてくたさい言ひ出すんよ。でも「はいそつですか」
いうわけにもいかへんやん。ほしたら潮はん、何やわけわからんこと言いだして、逃げ出
したんよ。皆さん、一緒にさがしとくんははれ！

大助 ちよ、ちよと待ちいな、今お金受け取るとこや。(と、懐から矢立を取り出す)

お留 ウチは別に怒つてるわけやないんよ、潮はんかてちゃんと話せばきつとわかつてくれる
おもて、

勘定の間より太郎が戻つて来る。

大助はお留に黙るよう仕草で伝える。

太郎 ほな納めさしてもらつて。

大助 へえ。

太郎は「覚え帖」に浜太郎五円と記す。

大助 おおきに。助かりま。

おはな ほなお世話さまでした。

太郎 ご苦労はん。

お留 旦那さん聞こえてましたやろ、

太郎 ああ、

お留 おつなちゃん、ここに来たらすぐ知らせとくんはれや。

太郎 わかったわかった。ちゃんと知らせる。

夫妻とお留は戸口より去る。

シーン⑤ カレーと国民

36

太郎 ワシは反対やぞ。

次郎 は？

太郎 お前が弁士をするごときや。おはなはんらの気持も、お前の言いつてもよゆうわかる。でもな、もし警察沙汰にでもなってみろ、お前の将来の障りになるやないか。

次郎 やりませんよ。やるわけないじゃないですか。

太郎 へ？

次郎 さっきのは方便ですよ。ああ言わないとあの人たち帰ってくれないじゃありませんか。わざといたんです。

太郎 ……。

次郎 それにしても五円は高すぎると思いますがね。

奥からお茂登場。

お茂 さすが浜家の総領ですな。ほんま出し惜しみはらへん。立派なもんだす。そやけど先々のことも少しは考えておくれやつしや。

太郎 うん。

お茂は奥に去る。

戸口から薬屋が登場。

薬屋 きのどくなねー。(「ありがとう」の意)

薬屋は荷物をまとめはじめる。

太郎 (ため息をつき)ピリツとしたもんが食べたいな。

次郎 カレーなんてどうでしょう。

太郎 なんやそれ。

次郎 もとはインド料理ですが、今はエゲレスでも食べられています。沢山の香料が入った汁をインドでは小麦を練って焼いたパンにつけるんですが、日本人ならご飯にかけるカレーライスが一番でしょうね。

太郎 どこで食べれるんや？

次郎 東京や大阪のレストランなら食べられますよ。

薬屋 ほんで、海軍さん。

太郎 海軍？

薬屋 はい。海軍さんでは兵学校からカレーを食べさせよります。カレーに使いよる人参、じゃがいも、玉ねぎ。これ全部日持ちも良いし、栄養も満点。汁はトロリとしたものから船が揺れてもほれん。つまり船の食事に向ってつけといてうわけちや。ほんで同じもんでも味付けを変えよったら「肉の甘煮」いう料理になるつちや。こーがまた白いご飯に合いよるんよ。ほんでから、こーは陸軍さんやが、同じ人参、じゃがいも、玉ねぎに豚肉を入れて汁にしよって、味噌で味をつけよると「豚汁」になりよる。豚の脂が汁のおもてに浮い

て、時間がたちよつても、温いまんま。いつまでも熱々を食べれるつちや、つまり野宿が多い陸軍さんにはピッタリの食べもんちや、

太郎 なんや人参、じゃがいも、玉ねぎばかりやな。

薬屋 さすが旦那さまよーお気づきなさつた。これらの野菜は、

次郎 北海道。

薬屋 さいです。こーはいわば国策料理。北海道でつくりよつた野菜が軍の料理にしてまう。よーできたもんです。

次郎 ほんとかな。

薬屋 仕事柄日本各地をまわりよるからね。足腰と直感は鍛えとるつちや。

太郎 弱いのは胃腸だけやな、

奥からお茂が戻ってくる。

お茂 この家かて、じきに建てなおさないかんいうてたんはドナタでつか？わたいが一銭でも無駄ないように気づこてますのになんですのん。五円？五円？？

38

お茂はしばし無言のち、また奥に去る。

太郎 ほんでそのカレーちゆうのはどんな味なんや。

薬屋 これまでこの国にはなかつた摩訶不思議な味、としか言いようがないが。ワシは神戸の居留地で食べよつたけど、舌にピリリときよつてね。汗、ダラダラ。そやけど風が吹きよつて汗がひくと、不思議ちやー。体の芯はホカホカとぬくまんま気分爽快。胃腸がほどよう刺激されよつて食べたばかりなのにもうお腹がすいてきよる。

太郎 よつしゃー！今夜はそれにしよ。

次郎 無理ですよ。

太郎 なんで？

次郎 カレーには沢山のスパイスが必要なんです。そう簡単に手にはいるもんじやありません。

薬屋　ぬふふふふ。

太郎　なんや？

薬屋は懐から包み紙を取り出す。

薬屋　お礼ちゆうほどではないちやが(と、小さな紙包みを太郎に渡す)。

太郎　これは？

薬屋　カレーです。

太郎　これが？

次郎　(包みからカレーの香りをかき)懐かしいなあ。良く手に入りましたね。

薬屋　スパイスの中にはワシら薬屋が薬の材料につこてるモンが仰山あるんよ。例えばウコンちゆうのは、(奥からお茂が来る気配を感じ)もし、お気に召しましたらまた言つてくれつちや。ぎょうさん仕入れて来るよつて。ほんなら、

薬屋は戸口より去る。

39

途中、庭にてネとぶつかり、ネが背負っていた赤ン坊が泣き出す(この様子は客席からは見えない)。

お茂　次郎はん。あんたもあんただつせ。おはなはんの言つことなんぞ耳から耳へ聞き流さはつたらよろしいのに、真に受けて演説までしてなんですのん。

太郎　あのな。文句あるんやつたらいつペンに言つたらどないや。出たり入つたりハト時計やあるまいし、

太郎の言葉が終らないうちにお茂は奥に去る。

太郎　すまん(と、お茂を追って奥に去る)。

シーン⑥ コイコイ節とパゲーノ

土間に次郎一人が残る。

庭からネの唄う子守唄が聞こえてくる。

♪ 山田コイコイ節

うとて回ればやかましけれど

これは守り子の役じゃものコイコイ

ねんねころいち 天満の市で

蕪揃えて 船に積む コイコイ

ねんねねんとお尻をたたく

なんで寝らりよかたたかたかたコイコイ

赤ん坊は眠ったようだ。

戸口からネが入ってくる。同時に次郎は竈の裏に隠れる。。

ネは汗だく。水壺から水を飲むと、おんぶ紐を緩め、赤ん坊を落ち間に寝かす。

次郎が現れる。

次郎 抱かせて。

ネはこわこわ赤ん坊を次郎にわたす。

赤ん坊はすやすやと寝ている。

次郎 よかった。

ネ ……。

次郎 鼻筋は義姉さんそっくりだ。もっともそれ以外は兄さんそっくりだけどね。

ネ へえ。

次郎 さっきの子守唄。「の辺じゃ蕪はつまないよ。」

ネ はあ。

次郎 こころじゃ大根。君は山田の生まれだろう？

ネ へい。

次郎は赤ん坊を落ち間に寝かせる。

次郎 僕の顔をよく見てごらん。目の黒いところイトクズみたいな傷があるだろ。

ネはこわこわ次郎の目を覗きこむ。

次郎 君からは小さな傷に見えるだろう。僕にはこれがとても大きく見えるんだ。いまでも君の顔の半分はこの傷のせいでキラキラ光ってみえる。

ネ どこでやすか？

次郎 ほらこゝ、よくみなよ。

ネがさらに覗き込んだとき、次郎はネを抱きしめた。

緊張したまま、けれど抱かれているネ。

ネ アキはんと一緒にならはるんやろ。

次郎 うん。

ネは次郎を払いのける。

次郎 イスタンブールは花の都だ。ヨーロッパ、アラブ、アジア、色んな国の人がいるね。色んな美人が街にあふれている。ペルシャ、クルド、ユダヤ、アゼルバイジャン、インド、シチリア、世界中の花を集めた街。目が鋭い人、鼻の高い人、顔を近づければみんな実に個性的な匂いがした。色々と目移りしていると日本人の顔じゃもの足りなくなるんだね。薄味というか、淡泊というか。

ネ 何を言ってるさる？

次郎 ……今も船に乗ってるような気持なんだ。

次郎は手を広げ、くるくる回りながら歌いだす。

♪「パパの二重唱」

次郎 ♪。パ。パ。パ。パ。パ。

ネはじめて見る奇態な歌と踊りに心奪われる。

そして次郎の腕のなかに……、

庭から足音がして、二人は慌てて離れる。

シーンの⑦ 潮

戸口からアキが飛び込んでくる。

ネは赤ん坊を抱き上げる。そして通路に去る。

アキ お願い。

次郎 え？

アキ 匿ってほしいんよ。

次郎 誰を？

アキは庭に向かって「おつなちゃん」と声をかける。

庭に隠れていたおつなと潮が戸口から来る。

次郎 潮！…わかるか？僕、次郎だよ！

潮 ……。

次郎 ダメか。

アキ 実はお留はんらが、

次郎 知ってる。さっき本人が来た。

おつな すんまへん。ウチも最初は賛成してましてん。そやけど兄さんが嫌がるのみたら、
「なんや兄さんを見世物にするみたいな気がしてきて、

アキ うちで匿ってたんやけど小さい家でつまかい。じきに見つかるおもて。ここのお屋敷で
なんとかならへんやろか。

次郎 でも匿うって言っても、他にもつといい場所があるんじゃないか、

アキ ここやったらあの人も無茶でけへん、次郎はんお願い。

次郎 でも、蔵のカギは兄がもってるし、急に言われても、

裏門から中庭に人が来た気配。お留とおはなだ。

アキ (戸口から庭先を覗き)来た。

次郎はうろたえるばかり。

アキは土足のまま落ち間にあがり、その横にある勘定の間におつなと潮を隠す。

次郎とアキだけになった土間。そこにお留、おはなやつて来る。

次郎 どうも。

お留 (アキを睨んで)アキはんあんたここでなにしていますの？

アキ へえ、次郎はんの話とかなあかんことありまして。

お留 どんな？

次郎 そんなことアナタに関係ないでしょ。

お留 すんまへんけどお屋敷みさせてもらいまっせ。

お留とおはなはあちこちを調べる。

奥から太郎とお茂が来る。

太郎 お留はん何してるんや。

お留 すんまへんな旦那さんすぐ終わりますよって、ちよつとお屋敷検めさしてもらいますわ。ごめんやっしや。

お留は落ち間に土足のまま上がる。

おはなはそこまでの不躰は出来ない様子。

お茂 「検める」ってお留はん、それどついう意味ですのん。

お留 なんで「こ」にアキはんがいますねん？

次郎 それは、私に用があつてきたんです。

お留 旦那さん、約束してくれましたやん。潮はんが来たら教えてくれるって。

太郎 おお、来たら知らせるがな。

アキ お留はん。もう諦めたらどないですの。潮はんえらい嫌がつてますやん。

お留 へー。アキはん。よう知つてますな。やっぱりおつなちゃんも潮はんもあんとこ逃
44
げたんやね。

アキ お留はん、どないしはつたん？なんやいつものお留はんらしゆうないわ。

お留 ウチはな。抗議の集会するんやつたらウチらみたいな戦場を知らん女ばかりで行つてもしやーない。ほんまに戦争いかはつて十分苦労なさつた方に来てもらわんと迫力に欠ける思てんのよ。

アキ そやけど潮はんは耳聞こえまへんねんで。そんな人ひっぱりだそうやなんてお留はん残酷やわ。

お留 ウチはな。潮はんが怪我しはつて、帰つてからも一言も喋らんようになった聞いて、ほんに戦争は酷い思たんや。戦場に行った子らがどんな苦労したか潮はんを見てもろたらいつへんにわかります。

アキ 本人が嫌がつてますねん！

お留 ……。旦那さん、「こ」も検めさせてもらいますで。

そう言ってお留は「勘定の間」の戸に手をかける。

奥よりまんが来る。

まん 待ちなはれ。そこは女の入るようなと「やおまへん。

お留 気悪しはつたら勘弁しとくんはなはれや。わてらかて我が為思てしてるんちやいます。このままやと死んだ子ら報われんそない思てしてますねん。

まん お留はん、頭冷やしな。あんたみたいな人が村のしきたりを守らんどないする。

お留 しきたりどつこう言ってる場合とちやいますんや。わてら日本のため思てしてますんや。「ごめんやつしや。

お留は改めて勘定の間に入ろうとする。

まん 慎しみなはれ。

45

お留は落ち間から土間に降りる。

まん ……太郎、お前が検めなはれ。

太郎 へ？

まん はよう。

太郎は勘定の間に入る。少しして出て来る。

太郎 誰もいまへん。

しかしお留はそれを信じず勘定の間に向かって声をかける。

お留 潮はんあんた口惜しおまへんのか。このままやとあんたの苦勞も無駄になりますねんで。あんただけやない、あんたと一緒に戦うた人らの苦勞も無駄になります。それでよろしおますのか？

太郎 お留はん誰もおらへんにやさかい、やめとくんははれ。

戸口から大助が飛び込んでくる。

大助 お、大阪でえらいことなつてまつせ。

おはな 何が？

大助 も、戻りの船頭連中に聞いたんや。わ、わてらみたいに講和条件に一発いてこましたろちゆう連中が、な、中ノ島の辺に集まつてるみたいやで。

大助の知らせにお留とおはなは勢いづく。

お留 (勘定の間に向かつて)おつなはん、聞きましたやろ、ウチらだけやおまへん。大阪中⁴⁶が、いや日本じゆうが怒つてまんや。

おはな ウチらは何も潮はんを見世物にするつもりはおまへん。集会にできれば潮はんみたいにしんどい思いしてはる人もいつばい来はりますやろ。一人で苦しい思いすることおまへん。わてらと一緒に大阪いきまひよ。

アキ 何をいうたかて本人が嫌がつてますねん。あきらめたらどないだつたか。

お留 (勘定の間にむかつて)潮はん、あんた海軍さんでっしゃる。「苦勞はんどすな、つらおましたな。海軍さんはどんなとこでした？船の上はどんなとこでした？なんぞ喋つておくんははれ！

おつなが勘定の間より出てきて。

おつな 兄さんが戦場でどんな目にあつたか、わざわざ喋らんでもわかるやおまへんか。

それを無理矢理喋らせようやなんて酷いと思いまへんか！

お留 ウツと「の子も海軍ですわ。海軍はむごおすな、死んだいう紙切れ一枚で骨もな
んにもあらしまへん。なあ、潮はん、教えとくんはなれ、海軍はどんなと「だすねん？ウ
ツと「の子は、何をしてみましたんや？何で死んしまいましたんや？

お留は泣き崩れる。アキとおはなはお留を慰める。

次郎はうんざりする。そつと土間を抜け出そうとするが、

まん 次郎。どいきますんや。

次郎 はあ(土間にとどまる)

大助 お、大阪じゃもう戦争継続の幟があがつてるそつや、「らえらいことなりまっせ。

おはな は？

お留 よし！

おはな ちよつと、戦争継続ってなんですか？

大助 そ、そやから続けるんやがな。

おはな はあ？アホいいな。そんなアホなことさせますかいな。

大助 今さら何をいうんや。

お留 そつやでおはなはん、ウチらかて腹くくらなアカン。

おはな 嫌やウチは反対やで、ほしたらウチは講和賛成や。

大助 ドアホ。

と大助はおはなに向かって手をあげる。

しかし周囲の目を気にして撲ることはできない。

おはな アホはあんたや、あの子はどうなんの。戦争から帰ってきてまた戦場に逆戻りだつ
か。

大助 安心せえ。お上かて鬼やないわ。二辺もお勤めさすかいな。それにな、もう帰って
きはらへん人かておるんや。その人らの気持ちも考えなアカン。

おはな (お留を見つづ)……。そやかて嫌や、嫌なもんは嫌や。

お留 おはなはん。そんな理屈は通じまへん。

おはな 嫌や嫌や。ウチは講和賛成や！

大助 まだ言うか！(と、手をあげる)

太郎と次郎が夫妻の間にはいる。

大助 すんまへんな旦那さん、ワシが甘いよつて女らあのさばらしてもつて、

おはな アンタはあの子が可哀そうおもわんのか、己の息子も守れんにやったら父親な

んか辞めてまえ！

大助 (太郎と次郎に)すんまへんなあ、恥ずかしとお見せして、

おはな 何が恥ずかしい！

大助 何を！

大助はさらに激高するが、浜家一家の手前、乱暴なことは出来ない。

48

大助 次郎はん、あんさんからも言つたつとくんははれ。

次郎 いえ私は、

アキ 遠慮せんと、ほら、

次郎 ……仮に戦争を継続したら、日本は必ず、……負けます。

夫妻、お留、おつなは驚き、次郎を睨む。

次郎 いえ、言いすぎました。勝負事ですから負けることもあるし、勝つこともあるでしよ
う。

お留 日本は負けまへん！お国のために死んでいった皆さんがきつと日本を守ってくれま
す。そつでつしやる？

次郎 はいそつです。日本は負けません。

太郎は落ち間に仁王立ちし、皆を見下ろす。

太郎 わかる。皆の気持ちはようわかる。さつきから聞いてると皆正しい。皆真剣に考えてる証拠や。ワシはそう思うぞ。

まん ほんで？

太郎 つまり、こんな風に喧嘩するのはちやう思いまんねん。宮川はんかて戦争したいわけちやいますやる。講和条約さえもうちよつとどないかならんかいう気持ちでつしやる？それははな「はんかて一緒ですやん」。

お留 あああーそんな甘い態度で政治が動きますかいな。そもそも選挙いかはる方がそれやさかい、ウチら貧乏人がこんな目に会いますんや！

太郎 いや…ちやうがな、ワシが言いたいことは、同じ気持ちでおるモン同士が、ちよつと意見がちやうからいうて喧嘩すんのは、悲しいなあ思てんねん。

まん ほんで？

太郎 ほんで…、なので…、ワシは皆に先駆けて、黙ります。

次郎 まあ、順序としては、ここは内閣の打倒を訴え、政府に圧力をかけましょう。

その為のかけひきの文言として戦争継続は十分ありえます。

お留 駆け引きやないぞ。イザとなつたらほんまにやるんや！

おはな 嫌や。

次郎 いや、駆け引きですよ。あくまでかけひき。

おはな 嫌！

アキ いい加減にしなはれ！お留はん。戦争継続やなんて本気で言うてますの？やつと終わつたんやないの。ここで戦争続けたらお留はんみたいな目にあう人が増えるだけなんよ。それでええの？

お留……。

アキ 次郎さん。駆け引きでも継続やなんて言つたらアカン。偉いさんにどない利用されるかわかりまん。

次郎 いや、別に、僕はね、あくまで一案を提示しただけであつて、

おはな ほしたらアキはんはどない思てんの？私らどうしたええの？

アキ ウチらは、知らなすぎるんや思う。この戦争のほんまの姿を。きつと頭のええ人らは、色んなことを隠してたんや思う。だって、この戦争の為にウチらから兵隊やらお金やら出させなあきまへんやろ、ウチらがやる気なくしたら、戦争も続かへん。ウチらにいっぱいウソついてたんや思う。そやけど、今度の講和条約は国と国との約束や、ウチらにいつてきたウソなんか、外国相手に言いだす隙もあらへん。ほんでこの条約でウチらに隠してたことが全部ばれてしもたんや。日本は勝った言ってるけどギリギリや。も一辺戦争したら、今度こそボロボロに負けてしまっわ。

お留 アキはん。うち、こんなに悔しいのはじめてや。

アキ いまこの国で選挙権を持ったはるのは、ほんま一握りの人だけです。そやけど戦争行くのも、税金払うのも、ウチらやおまへんか。ウチらにも投票する権利があつて当然や。ウチらはこの国の国民なんや！

お留、おはな、大助はアキの言葉に感動し、拍手する。

通路からオマサが現れる。

オマサ その、国民いうの辞められまへんやろか？

アキ え？

オマサ 国民やさかいウツとこ孫は戦争いかされましたんやろ？国民やなかったらあの子は死なずにすんだんや。

大助 オマサはん。何をスカタンなと言ってるんや、

オマサ すんまへん。そやけど、国民やなんてそんなたいそうなもんにもらわんでけっこうですねん。あの子はそんな立派な人間やおまへんで。皆さん知つてまつしやろ。ウツとこの孫がどんなんやったか。トンビと卵焼きとりおうたり、へびトウの汁でオベベ汚して、ウチが毎日それ洗ろてましてん。憶えてまへんか？あれが国民にふさわしい思いまっか？旦那さん、どうか旦那さんのお力でウツとこの子らを国民から外してもらえまへんか？この通り、おたのもうします。

皆はあつけにとられる。次郎のみ笑いをこらえている。

大助 オマサはん。あんたの言うてることは、お孫さんへの、ズン、侮辱だつせ、

オマサはうなだれると台所に行き、箒を手取る。

そして土間の皆を睨みつけると、「きえー」という掛け声と共に箒で皆を叩いてまわる。

オマサ 目さませー！

皆は口々に「痛い」とか「何しますの」とか言うが、オマサは耳をかさない。

オマサ お前ら騙されとるんじや。何でウチらの子が、外国まで押しかけて戦争せにやらん。何の恨みがあるんや、言うてみい！もうこれ以上騙されたらアカン。目さませー！
目さませー！

オマサは再び皆を叩いてまわる。

土間は大混乱となる。

勘定の間より小さく「軍艦マーチ」が聞こえてくる。

シーン⑧ 総員持ち場を離れるな！

勘定の間から潮が飛び出してくる。

『軍艦マーチ』を歌いながら、脇をしめ膝をあげてそこいらを走る。

皆はあつけにとられるが、おつなだけは必死に兄を止めようとする。

おつなは「お兄ちゃんー」「やめーな」など言って、兄の袖をつかむが潮は止まらな

い。やがて潮は台所で火吹き竹を見つけた。手に取って中を覗く。

潮 おお！きよつた！きよつたぞー！」「本日天気晴朗ナレド波高シ」。

潮は戦艦になり切つて対馬海域を目指す。

エンジン音や波が碎ける音、海鳥の声などを口で演じる。

大助が潮に近づき、

大助 まあまあ、落ち着く、御寮さんすんまへん、水もらえまつか、
お茂 へえ、

潮 (竹を覗きながら)おおー！「三笠」に乙旗があがったぞー！

大助 潮くん、

潮 「皇国の興廢この一戦にあり、各員一層奮励努力せよ」！

潮は大助に敬礼をする。

大助もつられて返すが、その敬礼は陸軍式の敬礼。

潮はそれが気に入らないようだ。

潮 こつじやないーこつだー！

おつな (大助に)脇をもつとしめて。ほんで手ももつと縦に、

潮 ラツパふけー！ー！。

兄の奇行は止まらなないと覚悟したおつな。

皆に頭をさげた後、息を思い切り吸うと、口でラツパの真似。

おつな パ。パ。パ。パ。――！

潮 左回頭！

おつな 左回頭――！

潮は左に曲がる。その後ろを腰を屈めたおつながついて行く。

潮　ズボーーーーン、ズボボーーーーン！

潮は体を揺らす。

おはな　ズボーーーーン？

おつな　たぶん水柱や思います。

おはな　水柱？

おつな　いま攻撃されてますねん。

大助　そらアカン、

おつな　もうじき反撃しまつさかい、

潮　左旋回終了。砲撃準備……！

おつな　砲撃準備！

潮　信号距離七千。

おつな　距離七千。

潮　目標敵旗艦スワロフ。

おつな　目標敵旗艦スワロフ

潮　撃ち方、はじめ……！

おつな　ドワーーーーン。

おつなは大砲を撃つ仕草。

大助　当たったんか？

おつな　まだわかりません。

潮　クソー、左にそれた！

この時、艦に敵弾が命中したらしい。

潮 ドカーン！

おつなはその場に倒れる。

潮 総員持ち場を離れるな、総員持ち場を離れるな、甲板シヨウベン勝手次第、甲板シヨウベン勝手次第。ウー、ウー。

太郎 (おつなに)大丈夫か？

おつな 代わって、

太郎 へ？

おつな 交代！

おつなは立ちあがると台所の隅に隠れる。太郎はうろたえる。

潮 ドカーン！

またも敵弾命中。

太郎は倒れる。

潮 (倒れる太郎を見て)おーい、担架や、こつちや担架持ってこい！

おつな (大助とおはなに)どうぞ。

大助 へ？

おつな 担架。お願いします。

おはなと大助は担架を持って太郎に近づく。

その間に、潮は弾薬を運ぶ(ふり)

おはな 旦那さん、のつとくんはなはれ。

太郎 どないして乗るんや。

おはな ふりでよろしいねん、

こつして太郎は運ばれる。

次郎はこっそり土間からいなくなる。

潮のなかでは、艦は上下左右に揺れ続け、波が滝のように甲板を走る。

潮は重い鉄の弾を両手に抱え一人で運ぶ。大砲の側まで来て弾をこめ照準をさだめるが、揺れのため思うようにいかない。

見かねたお留が、それを手伝う。

お留 支えてまつさ！

潮 ドワーーーーーン！

またも敵弾が命中する。

お留と潮は倒れる。しかも潮は怪我をしたようだ。

お留 潮はん！しっかりしなはれ！

潮 弾や、弾もつて来てんか。

お留は弾を運ぶ。

大砲の側まで来て潮と共にこめる。照準を合わせ、

潮 目標、右前方旗艦スワロフ、信号距離六千。

お留 距離六千。

潮 発射。

お留 ドーーーーーン。

命中したかは潮の気分しだい。

しかし潮は黙ったまま。

お留 どうなん？潮はん、弾は敵に当たりましたん？

中庭のクスノキで一斉に蝉が鳴りだす。

潮は頭を抱え。

潮 イタ、イタタ。

おつなお兄ちゃん！（と潮に駆け寄る）

潮はおつなを払いのける。

お留も潮を介抱しようとするが、それも払われる。

大助と太郎が潮を取り押さえる。

そのさなか、太郎の懐から包み紙が落ちる。

潮はその匂いを嗅ぎ、それを拾い上げると包みの中の粉を宙にばらまく。

土間にカレーの匂いが充満する。

潮 カレー…食いてえ…

あつげにとられた皆を残し、潮は土間を出てゆく。

おつながそれを追う。溶暗。

シーン⑨ 何のための勉強？

同日夜。

次郎とアキがいる。提灯が二つ。

一つは落ち間に置かれており、一つはアキが手に持っている。

中庭から虫の鳴き声。遠くから蛙の声が聞こえる。

アキ ウチ。東京にはいきまへん。

次郎 どうして。

アキ すんまへん。

次郎 だからどうして？勉強はどつするの？世の中のために勉強するんじゃないの？

アキ 勉強は東京やのつてもできますし、

次郎 出来ないよ。知識も技術も人もみんな東京に集まるようになってる。こゝで勉強しても一年もしないうちに、東京に行きたくなる。東京にしか本。東京にしかない

先生、

アキ わかつてま。

次郎 じゃ、どうして？

アキ ……。

次郎 ……。そうか。なるほど。

アキ すんまへん。

次郎 …。やっぱりなあ。

アキ え？

次郎 なんか、昼間にあつた時からそんな予感がしてたんだ。

アキ すんまへん。

次郎 みんな変わつてゆく。変わらないのは僕だけか、

アキ ……。

次郎 何のために勉強してるんやろ。

アキ え？

次郎 そう言われて、僕も考えたんや。(☆こより関西弁)

アキ へえ。

次郎 僕はクズや。人間のクズ。たしかに僕は頭はええし、育ちもええ、気持ちは優しいし、女性には特に優しい。でも、ただそれだけの人間や。世の中の役に立ちたいと思う

気持ちがまるでない。まったく沸いてきーひん。社会の役に立たへん男。こればかりはし

やーないおもてます。(☆)ここから標準語)でもね、僕は買きますよ。クズの道を。いや
貴くなんて力んだ言葉は似合わない。漂います。世界のあっちこっち、命がけで漂うんで
す。

アキ ……。

次郎 では、さよなら。

アキ …お世話になりました。

アキは戸口から出てゆく。

二人の様子を奥からこっそり見ていたお茂が登場。

手には風呂敷包みを持っている。

お茂 次郎さん。

次郎 聞いてたんでしょ、

お茂 ちやうんよ、これお屋のお稻荷さん、えらい余つてもたから、アキさん来てるん
やったら持って帰ってもらおもて、

次郎 ください。

お茂 は？

次郎 なんかお腹すいちゃって、

お茂 はあ、

お茂は風呂敷を広げる。お重の蓋をあける。

次郎 ほう。なるほど。確かに京都らしい。

お茂 こっちが山椒で、こっちが五目です。

次郎 (つまみ)うん。美味い。

お茂 次郎さん、ほんまにええの？あんなにあつさり終わらして、せつかくお母さまから
お許しもでたのに、

次郎 源氏物語のような、つまりフラれた方が生霊になつてとりついて殺しちゃうような価値基準からすると、あつさりすぎかもしれませんね。しかし私たちは、もつと同志的な、つまり友情と友愛を元にした連帯を大事とする価値基準のなかにいるのです。そしていま義姉さんが覗いたのは、鉄道のポイント、分岐点、あなたはアチラ、わたしは「チラ、それではお互いお元気で。そういう風景を目撃したと思つてください。

お茂 ……。これからどうしますの？

次郎 「心配なく」に長居はしませんよ。

お茂 そんなこと言つてまへんやん。「」は次郎さんの生まれた家やし、ずっと居てもろたらええんでつせ。

次郎 そりやどつも。

お茂 これから何の仕事しますの？

次郎は懐から冊子をとりだす。

次郎 「ホトトギス」

お茂 は？

次郎 俳人の正岡子規先生という方が出している雑誌です。

お茂 まあ廃人やのに、

次郎 俳句を詠む人です。正岡先生は俳句やら短歌やらを今の時代にふさわしい芸術に革新された偉大なお方です。

お茂 その方のお世話になりますの？

次郎 先生はもうお亡くなりになりました。「ホトトギス」はその御弟子さん達が先生の意志を継いで刊行しています。

お茂 ほなどうしますの？

次郎 ロンドンにいた時、最初にお世話になった方が、正岡先生のご友人でね。日本では高等学校で英語を教えていたそうです。おかしな方だね。不機嫌そうな顔をして、ジャムを一瓶ペロリと平らげてしまう。僕がついてすぐ帰国してしまったのですが、い

や、あれほど面白い先生は、なかなかいません。その方が、「ホトトギス」に小説を書いたんです。(冊子を開き)「吾輩は猫である。名前はまだない」。どうです？

お茂 は？

次郎 まるで僕のことじゃありませんか。「吾輩は猫である。名前はまだない」

次郎はクスクス笑うが、お茂にはよくわからない。

お茂 そや次郎さんは小説家さええわ。小説家になりよし。

次郎 ダメですよ。

お茂 なんて？

次郎 僕には愛がない。僕には一般大衆に対する愛がないんです。愛のない人間の書く

小説なんてインテリゲンチヤの自己満足に過ぎません。そんな小説だけは書きたくな

い。

お茂 なんや励ましがいのない人やわ。

次郎 ……。

お茂はくしやみをする。

次郎 夏も終わりましたね。

お茂 夜だけ。明日も昼間は暑おすえ。

次郎 これ、片づけます。

お茂 そつ。ほな、もうねまつき。お先。

次郎 はい。お休みなさい。

お茂は奥へ去る。

次郎はお重のお稲荷をむさぼる。

ほつぱり過ぎて胸が苦しくなる。指をなめる。

その手で「ホトトギス」を開く。寝そべり、行燈の明かりでそれを読む。

やがて切なさがこみ上げ、顔がゆがむ。

ほんの少し嗚咽がもれる。

台所から物音がする。次郎がそちらを向くと、いつの間にかネがいた。

ネ ニヤー。

ネは次郎を優しく抱き、その胸もとで次郎は泣いた。

溶暗。

シーン⑩ カレーの日

三週間ほどすぎた。

稲刈りを間近に控えた田では、稲穂が秋風に波打つ。

村のあちこちに彼岸花が群がって咲いている。

小高いお宮から赤とんぼが飛んでくる。

子供たちは元気にそれを追いかける。

浜家では村で初めてとなる「カレーづくり」が始まっていた。

おはなと太郎が鍋をかき混ぜている。

太郎の背中には赤ん坊がくくり付けられている。

落ち間に腰掛けて大助と薬屋がビールを飲んでる。

オマサは三週間前より重い足取りで、カレー作りの雑用を務めている。

大助 旦那さん、まだでっか？

太郎 まだ最中や、

大助 ビールのうなつてまいますせ、

おはな ちよつとーアンタも手伝いーな、

大助 (ビールをつぎ足しながら)へいへい。

薬屋 (ビールを飲みほし)あー……。気の毒なねー。

太郎 (薬屋に)野菜煮えてきたぞ、次どないすんにや？

薬屋 肉は？

太郎 お留はんがもうじき持って帰ってくるはずやけど。

薬屋 やや大きめに切った肉を、匙でほぐれるくらいまで煮込む。安い肉ではあきまへんで。

大助 大丈夫や。なんせ五円やしな。

太郎 もう言わんといってくれ。

大助 いや感謝してますねん。あの五円をこんな風につくて貰えるやなんて、

太郎 いづべん出したもんを、財布にしまえへんがな。

おはな さすが浜の旦那さんや。

太郎 (唇に指をあて)ウチのんには内緒やぞ。

大助 わかつてま。

薬屋 あの方はどいかはったちや？弟さんは？

太郎 ……。

薬屋 「うん。うん」言うてた女の子もおらんね？

太郎 ……。

お留(声のみ) 旦那さん。お肉買ってきましたでー！！

おはな (戸口から庭に向かって)どやった？

お留が手に箸をもって登場。

箸には布巾がかかっており、中は竹皮に包まれた牛肉。

お留 (竹皮を広げ)ドスコーイ。

皆 おおー。

薬屋 こらスゴイ。

太郎 ほら、教えんかい、

薬屋 肉は大きめのサイコロくらいに切るんよ。ほんで牛脂をひいて。

おはな ギュウシ؟؟

お留 もろてきたで。

葉屋 チリチリ音するまで焼いてから、鍋に入れてちよ。

背中の赤ん坊が泣きだす。

太郎 どないした？マンマか？ねんねか？シツシ？…うーうんか？

太郎は奥へ去ってゆく。

しかたなく葉屋はビール片手に肉を焼くことに。

宮川夫妻とお留は顔を寄せ合い。

おはな やっぱリネコはんもいまへんな。

大助 うん。噂はほんまかもしれんな。

お留 噂？

おはな 次郎はん、駆け落ちしたんやて。

お留 誰と？..?

中庭からおつなの声。

おつな（声のみ）ごめんやすー。

おはな（戸口から庭に）ごち！

おつなと潮が登場。

お留 あら一緒かいな。

おつな へえ、カレーって聞いたら一緒に行く言うて。

潮 こないだは、どうも、すんまへんでした。

おはな ええんよ。

大助 元気そうで良かった。

潮 清六は？来てまへんの？

おはな・大助 ……。

おはな 潮はん、いっぺんウチに遊びに来たって。潮はんやったらあの子かて顔出す思うねん。

潮 はい。

大助 清六に縁談が来てましてな。

お留 …どこから？

大助 大阪のえらい金持ちが言うてきましてん。名誉の負傷を追った清六くんに、ぜひ紹介したい娘さんがいる言うて。

お留 ほんで、どないしまんの？

大助 もうどないしてええんか……

肉を焼く音と匂いが土間に漂う。

おはな さ、カレーやカレー！

潮 カレー。

お留 懐かしおますか？

潮 へえ。わしのいたころでは、いつも金曜日に食べてました。

お留 金曜日？

潮 (伝わらず)は…。

おつな なんて、金曜日なん？

潮 ああ。鎮守府の偉いさんが決めたんですわ。

おつな なんて、金曜日なん？

潮 長いこと船乗ってるど、今日が何曜日かもわからんようになりまっしやる。そやしカレ―食べたし今日は金曜日。

おはな よう考えてまんな。

薬屋 さあ、肉を入れませ。

薬屋は野菜を煮ていた鍋に焼いた肉を入れる。

薬屋 (菜箸で釜からつまみあげ)蓮根？

おはな ジャガイモなかったさかい。

薬屋 (別のものをつまみ)これは…？

おはな オアゲさん。

薬屋 なんぞ？

おはな そこ、あつたさかい。

薬屋 ……。では、カレーパウダーをいれますよ。

薬屋は釜にカレーパウダー(赤い缶に入っている)を入れる。
辺りにカレーの匂いがたちこめる。

おつな ふわー！

お留 ウツとこの子も、これを食べてたんやね。

奥から太郎が登場。

太郎 お、やつとるな。

薬屋 あとはトロミがつくまで煮込んだら完成ですわ。

おはな そやけど、これシャバシャバでつせ。

おつな ほんまや。片栗粉でも入れた方がええんちゃう？

おはな そやな。

薬屋 勝手なせんといて。

おつな それかお砂糖どないやろ、あれもトロつとしますえ。

薬屋 ーじら、

おはな 旦那さん、片栗粉とお砂糖借りませ。

太郎 どうぞ。

おつな (味見して)辛いけど…、どやろ？

おはな 出汁ジャコも入れとこか。

薬屋 ちよつと！

奥からまんがお茂に支えられ登場。

お留 お家さま、お邪魔してます。

客人らは頭を下げる。

太郎 アカンがな、みんな集まったら呼びまっさかい、寝てなあきまへんで。

お茂 そやけど気になる言うて、

まん なんの匂いだったか？

太郎 カレーですわ。もうじき終わりますさかいな、ちよつと辛抱しとくんははれ。

薬屋 どうです？お家さまも召し上がりにならんね？

太郎 こら。こんなもん食べたら胃袋ひっくりかえってまっやないか。

まん いただきますひよ。

太郎 え？

まん なんや、お腹がすいてきました。

おはな いま味見してま。

まん わたいがやりま。

太郎 でもカレー食べたことないでしよ？

まん わたいがやりま。

おはな、おつな、薬屋は味見の支度。

大助 旦那さん、東京の戒嚴令はまだ続いてまんの？

太郎 うん。えらい(沢山の意)人も死んでるみたいや、

大助 このままやと内閣も倒れるんちやいまつか？

太郎 恐ろしい話や、

大助 何が恐ろしおますねん。ワタイらの国でっせ、ワタイら怒らしたら内閣かて倒れて当然ですわ。

太郎 (やや皮肉っぽく)そやそや

薬屋 総理が変わっても何もかわりやせんが。長州と薩摩がかわりばんこに総理大臣するだけちや。

大助 そや、ほ、ほんまにこの国を変えられるんは、わてらの代表だけや。

おはなは味見の小皿をまんの元へ持ってゆく。

まんなは皿を見て。

まん 味噌汁？

薬屋 カレー。

まん (味見する)…。

お茂 どうです？

まん 味噌が足りまへんな。

お茂 お味噌足してやて。

おはな へい。

薬屋 カレーっちや！

アキ(中庭から声のみ) 「ごめんくださいー！。

太郎 来た。今日の主役や、

薬屋 主役？

おつな (庭に向かって)アキちゃん。

戸口からアキが登場。

紅色の袴に革靴。上は白地に桃色の矢柄模様の着物。

髪は後ろで一つくくりになっている。

アキ お家さま、ありがとうございます。

まん うん。

まんは立ち上がる。

まん 皆様。この度、アキはんが東京の学校で勉強しはるようになりました。今日、皆様にお集りいただいたのも、アキはんの門出を祝うためでもございます。アキはん。体にきをつけてな。

アキ はい。

皆はアキに拍手。

まん 実はこのことは最初、ウチの次郎が言い出したんです。次郎がアキはんを東京の学校に通わしたって、お願いしてきよったんです。ところが、これは急なことです。次郎が、…もう一遍留学することになりました、

皆は初めて聞いたような顔。薬屋だけが納得した顔。

まん この話もないもんになるか思ってたんですけど。先月、戦争の後始末のことで、皆して、ここで、大騒ぎしましたやろ、そんなときは思い知らされてん。勉強せなあかん。弱い立場にあるもんほど勉強して、同じ立場にある人を助けなあかん。わては昔はよかったとも思いまへん。今がようになったとも思いまへん。わてらは、言うなれば、いつべん乗ってしまたら、もう止まらん汽車に乗ってしまたんかもしれへん。どにに向てんのか、しつかり見て、間違いは正さなあきまへん。そやけど、わたいはもう歳だす。今さら

勉強もできません。でも勉強しよう思ってる若い人を応援することはできます。アキはん。よう勉強して、みんなが安心して暮らせる世の中にとくれやつち。

アキ はい！

皆は拍手。

賑やかなカレー作り続く中、アキはオマサを見つける。

アキ オマサはん。

オマサ ……。

アキ うち頑張つて勉強して、オマサはんみたいな人が幸せに暮らせる世の中をつくります！

オマサ (憎しみを込めて)は？

太郎 オマサ、ビールこぼしてもた。拭くもん持ってきてんか。

オマサは通路の暗がりに行く。

しばらく立ち尽くしていたアキは、やがて気を取り直し、皆へ挨拶に向かう。

わいわいがやがや。

賑わいは続く。

おわり

引用

朝日新聞 1905年9月1日版

協力

吹田市文化会館メイシアター

吹田歴史文化まちづくりセンター

宇津木秀甫石橋恒彦柘田健治

加賀真砂子

大町孝

瓢風正男

